

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 15 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520381

研究課題名(和文)デュレンマットにおける認識論の問題と自伝の可能性

研究課題名(英文) Epistemological Problems and Possibility of an Autobiography in the Works of Duerrenmatt

研究代表者

増本 浩子 (Masumoto, Hiroko)

神戸大学・人文学研究科・教授

研究者番号：10199713

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円、(間接経費) 660,000円

研究成果の概要(和文)：スイスの作家フリードリヒ・デュレンマット(1921-1990)は初期から一貫して、世界を人間理性では理解できない「迷宮」として描き出しているが、後期になるとさらに、人間は世界どこか自分自身のことさえ正しく理解できないのではないかという問いを立てる。晩年の作品『素材』は文学的素材の歴史を語ることで作家の人生を語るという特異な自伝であるが、これはそもそも「本当の人生」を描くものとしての自伝を書くことは不可能であるとデュレンマットが考えているからである。作家が頭の中で考え出した文学的素材の歴史を語ることによって人生を語るという自伝のあり方は、「考えたこともまた現実の一部である」という認識に基づく。

研究成果の概要(英文)：One of the most important motifs in the works of the Swiss writer Friedrich Duerrenmatt (1921-1990) is Minotaur in a labyrinth. Minotaur is a metaphor of the human being who has only limited capacity to recognize the world. The labyrinth is the world in which we exist, and the world as labyrinth is impenetrable for us. Furthermore, Duerrenmatt in his latter period (especially in the novel "Der Auftrag" and in the film script "Midas") asks if a human can understand himself. In his last work "Stoffe" (1981/1990) Duerrenmatt talks about a history of his literary materials as a kind of autobiography, because it is impossible for him to write an autobiography as a "real" history of his life. Literary materials are what the author thinks of. This idea to write a history of literary materials as an autobiography is based on the idea that thoughts are also a part of the reality.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学(英文学を除く)

キーワード：ドイツ文学 スイスのドイツ語文学 認識論 伝記文学

1. 研究開始当初の背景

20 世紀のドイツ語圏スイス文学を代表する作家フリードリヒ・デュレンマツト(1921-1990)は、1950 年代から 60 年代の初めにかけて発表した戯曲によってその名声を確立した。デュレンマツト研究が世界中でさかに行われた時期は、デュレンマツト自身が劇作家として活躍した時期にほぼ重なっている。1973 年に喜劇『加担者』の初演が大失敗したのをきっかけに、デュレンマツトは長期にわたって劇作家として危機的状況に陥り、結局は演劇と決別することを宣言するに至るが、それとともにデュレンマツト研究も下火になってしまう。今日ではデュレンマツトは、50~60 年代に書かれた喜劇と、同時期に書かれてベストセラーになった推理小説の作者として知られているにすぎない。

しかし、実際にはデュレンマツトは『加担者』の失敗以降も精神的に執筆活動を続け、1980 年から亡くなるまでの 10 年間に書かれた作品は、38 巻からなる決定版全集のうち、実に 8 巻にもおよぶ膨大なもので、その質の高さは 50~60 年代の作品を凌ぐほどである。特に最晩年の自伝的散文『素材』(1981/1990)は、発表当初から文芸批評家たちの間で非常に高い評価を受けてきた。なぜなら、それが文学的素材の歴史を語ることを通じて作家の人生を語るという、まったく新しいタイプの自伝だったからである。また『素材』は、デュレンマツトの作品を理解する上で新しい視点を与えるものでもあった。

このように、デュレンマツトの晩年の作品はもっと広く読まれ、研究されるべきものであるにもかかわらず、実際には『素材』によってもドイツ語文学研究者たちの間で再びデュレンマツト熱が呼びさまされることはなく、デュレンマツトを国民作家として称揚するスイス本国でしか目立った研究成果は挙げられていない。

スイスではベルン大学とスイス国立図書館の研究者たちを中心にプロジェクトを立ち上げ、1991 年にベルンのスイス国立図書館に寄贈された遺稿のうち、『加担者』関連のものを詳細に検討して、最晩年の作品『素材』と、1976 年に本として出版された喜劇『加担者』につけられた長大な後書きとの間に、密接な関係があることを裏付けた。『加担者』の後書きの中でデュレンマツトは戯曲の失敗の原因について考察しているのだが、作品とそこに描かれている登場人物のみならず、作者である自分自身についても考察を重ねるうちに、「自分自身を素材にすることができるか」という問題に直面することになり、それが『素材』を書くきっかけになったのである。この成果によって、それまで大きな断絶があるとみなされてきたデュレンマツトの中期の作品と晩年の作品との間の密接な関連が明らかになった。また、『素材』の遺稿が 20 年近く書き続けられたものであ

ったことも、スイス・プロジェクトチームの調査によってわかった。だが、彼らの研究の中心的課題は遺稿によってたどる作品の成立史であって、個々の作品の詳細な分析にまでは至っていないため、本研究では特に『加担者』の失敗以降の、演劇と決別した後の作品に焦点を当てることで、デュレンマツトを劇作家以上の存在として再評価することを試みた。

2. 研究の目的

本研究は、デュレンマツトの晩年の作品、特に映画台本『ミダス、あるいは黒いスクリーン』(1970/1980-84/1990)と中編小説『依頼』(1984-1986)、自伝的散文『素材』(1981/1990)を認識論的観点から分析し、自伝/伝記文学の可能性と不可能性について考察することを目的とした。

先にも述べたように、デュレンマツトが『素材』を書くきっかけになったのは、「自分自身を素材にすることができるか」という問いであった。つまり、人間は言語を用いて自分をとりまく世界を正しく、完全に表現できないだけでなく、自分自身のことをも表現できないのではないかと、それ以前に、人間は世界どころか自分自身のことさえ正しく認識できないのではないかと、という問いである。この問いは、真実の人生を描くものとしての自伝を書くことが可能かどうか、という問題にもつながっている。

このような問題意識で晩年の作品をよく見ると、『素材』の他にも、殺された実業家の人生を映画というメディアを使って再構築しようとするが失敗する『ミダス、あるいは黒いスクリーン』や、ある女性が家出して殺害されるまでの足取りを、やはりドキュメンタリー映画として再構成しようとするが失敗する『依頼』(1984-1986)など、自伝/伝記の不可能性をテーマにした作品が数多くあることがわかる。また、これらの作品がいずれも推理小説仕立てになっていることから、デュレンマツトにおいては自伝の問題は、初期の推理小説が扱ってきた認識論的な問題が根底にあることが推測できるため、本研究では自伝/伝記の不可能性をテーマとしたこれらの作品を認識論的な観点から分析し、デュレンマツトが最終的に『素材』で提示した新しい自伝の可能性を探ることを目的とした。

3. 研究の方法

デュレンマツトの後期の作品を具体的に分析するという方法を取った。その際、出版されたものだけでなく、ベルンの国立図書館に所蔵されている遺稿も適宜参照した。研究は次のような手順で行われた。

(1)デュレンマツトの後期の作品、特に『ミダス』と『依頼』において、認識論の問題がどのように扱われているか考察する。

(2) 『ミダス』と『依頼』を自伝／伝記の可能性という観点から分析する。

(3) 『素材』の、自伝としての特殊性という観点から分析する。比較対象として、デュレンマットと同時代に活躍したスイス人作家マックス・フリッシュ(1911-1991)の自伝風短編小説『モントーク』(1975)を取り上げる。

4. 研究成果

(1)デュレンマットにとって世界は不可解なものであり、作品中でその世界観を表すときは「迷宮」と「ミノタウロス」のメタファーが好んで用いられる。迷宮に閉じ込められたミノタウロスの比喻は、世界は人間理性では理解できないものであることを意味すると同時に、人間に限られた認識力しか持っていないことをも意味する。同じくギリシア神話由来のミダスは、世界／現実を言語と映像というメディアを使って描くことが可能か否かという問題を扱うために導入されたモチーフである。

(2)映画台本『ミダス』は殺された主人公の生涯を再構成する試みという体裁をとっている。死んだ人間が生きた姿で登場することは現実には不可能だが、ヴァーチャルな世界では可能である。この点を十分に意識した作りになっている本作品は、映画の虚構性を示すと同時に、視覚的な情報が虚偽である可能性も存在することを示している(特に遺稿の第11稿)。

(3)中編小説『依頼』も映像を使って殺人事件を再現しようとするが、失敗する話である。この作品では殺されたはずの人が生きてることが判明し、ある人物を当人だとアイデンティファイすることの不確実性が問題となる。これは、人間は世界どころか自分自身のことさえ正しく認識できないのではないかという問いでもある。この問いが、自伝を書くことはそもそも可能なのかという問いにつながっていく。

(4)『ミダス』はまた、ギリシア神話から題材を得ているという点で、短編小説『ミノタウロス』(1984/85)や、オイディプス神話を扱った『巫女の死』(1976)と密接に関係している。いずれの作品も、人間の理性と認識能力の限界をテーマとしている。

(5)『ミノタウロス』と『巫女の死』においても、『依頼』と同様、ある人物を当人だと同定することの不確実性が問題になっている(『ミノタウロス』ではミノタウロスの、『巫女の死』ではオイディプスのアイデンティティが問題となる)。彼らの自己理解は、第三者の目に映る彼らの姿とは異なるものである。さらにその第三者が複数いれば、複数の

理解が生まれる。このようにして唯一絶対の人物像が存在しないことが明らかになる。

(6)これらの作品はすべて殺人事件をめぐるストーリーであるという意味で、一種の推理小説となっている。デュレンマットの作品においては、「犯人は誰か?」という問いは「私は何者か?」という問いにシフトする。

(7)短編小説『巫女の死』は、喜劇『加担者』の長大な後書きの中に収められているが、この後書きが晩年の自伝風散文『素材』へと発展していった。

(8)『素材』は文学的素材の歴史を語ることで作家の人生を語るという特異な自伝であるが、このような書き方になっているのは、そもそも本当の人生を描くものとしての自伝／伝記を書くことは不可能であるとデュレンマットが考えているからである。

(9)作家のあれこれの経験ではなく、頭の中で考え出した文学的素材の歴史を語るという自伝のあり方は、「考えたこともまた現実の一部である」というデュレンマットの認識に基づいている。このような認識は『素材』とほぼ同時進行で書かれた『ミダス』にも見られる。

(10)『素材』に収められた最後のエピソード「脳」では、この「考えられたこともまた現実の一部である」というアイデアが最もラディカルな形で表現されている。つまり、このエピソードにおいては、人類の歴史が、ひとつの脳の考え出したものとして語られているのである。

(11)デュレンマットと同時代に活躍したスイス人作家マックス・フリッシュも、自伝／伝記の可能性の問題に取り組んでいる。フリッシュは自伝風短編小説『モントーク』において、一見フィクションを排した「本当の人生」を描こうとしているように見えるが、実はこの作品では50~60年代にかけて書かれた自作からの引用が多用されている。つまり作家の実人生が自作の引用からなる生として描かれているのであって、これはデュレンマットの『素材』の趣向から遠いものではない。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2件)

増本浩子「言語への懐疑とコミュニケーション不全 ホフマンスタール、カフカ、デュレンマット」、『DA』第9号、2013年、71-79頁、査読有。

http://www.lib.kobe-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0

000003kernel_81005934

Hiroko Masumoto: Eine noch mögliche Geschichte? Erkenntnisproblematik und Darstellbarkeit der (Auto-)Biographie im Spätwerk Dürrenmatts. In: Dogilmunhak. Koreanische Zeitschrift für Germanistik, Bd. 120, Heft 4, 2011, S. 73-91.査読無(招待論文)

〔学会発表〕(計 7件)

Hiroko Masumoto: Gleichnis des Lebens. Geschichte der literarischen Stoffe als Autobiographie Dürrenmatts. Humboldt-Kolleg Kyoto. 2014年3月2日、コープ・イン京都(招待講演)

増本浩子「デュレンマットの普遍性 スイスから世界を見る 故障のドラマトゥルギー」東京ドイツ文化センター主催連続講演会「ドイツの古典図書を古典新訳文庫で読む」2012年10月5日、東京ドイツ文化センター(招待講演)

増本浩子「デュレンマットの普遍性 スイスから世界を見る 迷宮としての世界」東京ドイツ文化センター主催連続講演会「ドイツの古典図書を古典新訳文庫で読む」2012年9月14日、東京ドイツ文化センター(招待講演)

増本浩子「言語への懐疑とコミュニケーション不全 ホフマンスタール、カフカ、デュレンマット」ベオグラード大学主催国際研究会「近代文化：スラブと日本の対話」2012年8月28日、ベオグラード大学(セルビア)

増本浩子「デュレンマットの普遍性 スイスから世界を見る デュレンマット入門」東京ドイツ文化センター主催連続講演会「ドイツの古典図書を古典新訳文庫で読む」2012年8月3日、東京ドイツ文化センター(招待講演)

増本浩子「アフリカ版『老貴婦人の訪問』マンベティの『ハイエナ』」阪神ドイツ文学会主催第207回研究発表会シンポジウム「ドイツ文学と映画」2011年12月11日、甲南大学

Hiroko Masumoto: Eine noch mögliche Geschichte? Erkenntnisproblematik und Darstellbarkeit der (Auto-)Biographie im Spätwerk Dürrenmatts. 韓国独文学会主催第18回ソラクシンポジウム、2011年10月1日、コーロン・ホテル(韓国)(招待講演)

〔図書〕(計3件)

フリードリヒ・デュレンマット『デュレンマット戯曲集第2巻』市川明、増本浩子、山本佳樹、木村英二(共訳) 鳥影社、2013年、684頁(『フランク五世』の翻訳153-302頁、訳注647-648頁、解題662-666頁を担当)

フリードリヒ・デュレンマット『デュレンマット戯曲集第1巻』山本佳樹、葉柳和則、増本浩子、香月恵里、木村英二(共訳) 鳥

影社、2012年、684頁(『ロムルス大帝』の翻訳265-392頁、訳注637-638頁、解題651-655頁、訳者あとがき664-682頁を担当)

フリードリヒ・デュレンマット『失脚/巫女の死 デュレンマット傑作選』増本浩子(訳) 光文社、2012年、325頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

増本 浩子 (MASUMOTO, Hiroko)
神戸大学・大学院人文学研究科・教授
研究者番号：10199713

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：